発問例

●二一三ページ

問 **これまで「私」は「何を待っているのでしょう」（二一二・12）、「誰を待っているのだろう」（2 行目）と自問自答していたが、第五段落ではそうした問いかけはない。このような「私」の態度からは何が読み取れるか。「胸を躍らせて待っている」（10 行目）、「一心に一心に待っている」（12 行目）に注目して考えてみよう。**

答 「待つ」ものが何か具体的に言い表せなくても、「胸を躍らせて待っている」からは「待つ」ことに希望を見出す様子が、また「一心に一心に待っている」からは「待つ」ことに対する「私」の前向きでひたむきな態度が読み取れる。

補 これまで「私」は「何を」「誰を」待っているのか、自問自答してはその答えを否定し具体的な答えを掴めずにいた。しかし第五段落では、「待つ」ものが具体的に何かということよりも、「私」にとって「待つ」ことが「胸を躍らせ」る希望の込められた行為であることが明確に示されている点がこれまで異なる点である。

問 **なぜ「私」は「私を忘れないで下さいませ」（12 行目）、「どうか覚えていてくださいませ」（13 ～ 14 行目）と呼びかけるのか。**

答 周囲の大多数とは異なる「私」のことを忘れないでほしいから。

補 ここまで確認してきたように、戦時下、次第に周囲が画一化されるなかで「私」は少数者の立場にいることになる。この小説が、そうした今にも周囲に飲み込まれてしまいそうな、かすかな〈声〉に光を当てたものであることを把握しておきたい。

問 **◉「私」が「あなた」にわざと教えないのは、なぜか。**

答 こうした「胸を躍らせ」（10 行目）ることと「むなしく家に帰」（13 行目）ることを繰り返す「私」の態度を示しながら、待つことで未来に感じようとする希望の内実を、読者を含む不特定多数の「あなた」にも主体的に考えてもらおうとしているから。

補 「私」にとって困難な状況が続くことは間違いないが、そうした中で、「私」はその希望を分かち合うことができる「あなた」が「私」を見つけることを待ち続けるという構図である。直接的には、「大戦争」の只中で何かを〈待つ〉ことへの呼びかけとも捉えられるが、抽象化すれば、広く、なかなか認められない思いや願いについて連帯できる相手を待ち続けるだけでなく、相手側の主体性を求めるようなニュアンスもある。

語句の研究

●二一三ページ

9 麦畑を流れる清水　「麦畑」とは麦を栽培している畑をさす。「もっと和やかな、ぱっと明るい、すばらしいもの」（二一三・8）からの連想で「春」「青葉」「五月」と続いているので、「麦畑」も麦を収穫する頃の初夏の麦畑を流れる清水のすがすがしさ、美しさをさし、今の「私」をとり巻く窮屈さとは異なる明るさを示していると思われる。

注意する語句

（＊で用例を示した）

胸を躍らせる…興奮して胸をわくわくさせる。
＊彼の帰宅の知らせを聞き、喜びに胸を踊らせた。